

近代朝鮮における植民地支配と唱歌教育

高, 仁淑
九州大学大学院人間環境学研究院 : 助手

<https://doi.org/10.15017/7364834>

出版情報 : 国際教育文化研究. 3, pp.127-127, 2003-06-30. Comparative and International Education, Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



[博士学位論文紹介]

「近代朝鮮における植民地支配と唱歌教育」

高 仁淑

本研究で取り上げる唱歌とは、近代学校教育の教科として西洋から日本・韓国などに導入、日本の植民地期に東アジアを中心に普及されたもので、今日の音楽教育に相当するものであり、本研究は、これまで未開拓の分野であった音楽による情緒的同化の過程を日本植民地期統監府～総督府時代の唱歌教科書の変遷に沿って詳細に明らかにしたものである。

本論文は、第1部 唱歌教育における植民地政策とその対応、第2部 唱歌教育の韓国音楽の旋律とリズムへの影響、そして補編 学校教育における唱歌教育の影響に分けて構成されている。

すなわち、第1部は、日本の「唱歌（しょうか）」が、1880年代以降朝鮮（旧韓国）民衆の間に流布していた「唱歌（チャンガ）」を吸収するその浸透過程を、各期の唱歌教科書の構造や内容を綿密に分析することによって、音楽分野における同化～皇民化の実態を追跡している。学校教育における唱歌の移植が朝鮮の人々にとって不可避であったとすれば、そのアンチテーゼとして展開された学校外における民族音楽運動は、いかに民族音楽を築いていこうとしたのか、異文化対応を日本と韓国の音楽的な特徴から比較し、リズムや旋律の変化など音楽的な要素を究明した。

第2部では、日本の唱歌教育の影響の下に置かれた唱歌が、1920年代を転機に童謡、芸術歌曲、大衆音楽などに細分化されていく。そのそれぞれのジャンルに分かれる過程を体系的に把握した。

補編では、アンケートやインタビュー調査を通して、文献研究のいわば裏付け調査を行なっている。日本・韓国・中国など東アジア地域の現地調査を積み重ね、実証的に展開されたものである。

長期間にわたって体系的に取り組んできた本研究は、植民地期朝鮮の唱歌の受容過程を、音楽教育、文化人類学、教育学の関連領域を総合的に用い、日本との比較の中で明らかにし、音楽をめぐる朝鮮の近代を、学校の内外、朝鮮半島の内外を合わせてトータルに追究した試みである。

また、国際性が高い音楽をテーマに、東アジア地域を結んだ人々の情緒的な共鳴台を精神的・教育的な営みととらえた本研究の成果は、植民地教育の全体像理解の一助となるとともに、後の音楽教育の方向性を見出すことのみならず、教育学研究における国際化の理論を構築する上で、教育学研究方法の可能性を示唆している。

これらの知見は、ひいては、日韓の教育学界や音楽教育研究学界、国際教育学研究分野の学術交流に貢献するものであると考えている。